
神様なんて、大嫌い。

月の旅人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様なんて、大嫌い。

【Nコード】

N9829D

【作者名】

月の旅人

【あらすじ】

両親が浮気していたって、家庭が崩壊していたって、神様を信じて生きてきた……。そんなマゼンダはある日突然神様に裏切られ、怒った彼女は大嫌いなクラスメート、クロウと共に神様殺しの旅に乗り出す……。果たして彼女達は本当に神様殺しを実行してしまうのか……。？神と少女の紡ぐ物語。

プロローグ（前書き）

これは、あらずじ通り、神様を殺しにいく主人公を描いた小説です。
神様を好きな方は読まない方がよろしいかと思われます。

プロローグ

わたしは神様がきらいです。

なぜなら神様はわたしをうらぎったからです。

なので、神様。

あなたをころしにいつでもいいですか？

ころしにいきます。ころしてあげます。

たすけをもとめたひとをすくわないのは神様しかくです。

わたしは神様がだいきらいです。

だれもわたしをきにとめない。

つまりわたしのこうどうをとめるひとはだれもないの。

さあ、神様。かくごしてください。あなたを、ころしにいきます。

全ての始まり

能力つきの瞳や見る者を感嘆させる美しい瞳や非常に平凡な瞳、種類は異なれど人間はそれぞれの目を持っている。

私の目はいわゆる「能力つき」だ。私の目は能力つきの印である、紅色をしている。

紅色の瞳は本来は遺伝子上、存在しないのだ。故に「神の瞳」と呼ばれている事もある。

有り得ない。神という論理はあまりにも土台が崩れやすいが不思議とこれに反論を唱える者はいない。

・・・否、私のクラスに、自ら紅色の瞳を持ちながらも反論を唱えそうなものが一人居る。

彼の名を、クロウ・クリューという。通称、C・C。

飄々としながらも、その美しい紅色の瞳は決して感情を映す事はない。

故に私が通う、私立中高一貫校の生徒は全員彼に何かしらの感情を抱いている。

それは例えば畏怖であったり憎悪であったりするわけなのだが。

「うつむ」

私は腕を組んで静かに唸ってみた。

そつえば、誰も彼の瞳が持つ能力を知らない。

そんな事を言えば、私も誰にも言っていないのでお互い様なわけだが。

考えても分からない事はいつまでも分からないので頭を切り替えて聖書に没頭する事にした。

私は、神様のみをこの世界で唯一信じている。

人間を信じる？・・・馬鹿馬鹿しい、銃だの核兵器だのが世界中で闊歩している中、誰を信じろというのだ。

世界を破壊するのは、人間の作った兵器。本当に愚かなあ、と聖書の文字を追いながらふと思う。

「・・・ちよつと、マゼンダ」

「Amen」

何やら女子が話しかけてきたけれど、返事を返す前に短く祈りを唱えた。

聖書を読む前と読み終わった後には必ず祈りを捧げるのが私のモットーだ。

聖書を閉じ、椅子に腰掛けている私を見下ろす女子を見上げた。

・・・たしか、彼女の名前はティンク。ティンク＝サレリア。

このクラスのリーダー的存在で皆に一目置かれている。さて、そんな彼女がこの私に一体何の用なのだろう？

「・・・マゼンダ。 今日、放課後付き合ってくれない？」

この台詞で私と彼らの物語は引き金を引かれた。

今思えばそうだったのだと思う。

随分と陳腐な台詞で始まったものだ。

だがその頃の私は愚かなまでに純粹で。

こくりと頷いて聖書に目を戻した。

神様が全て、何か困った事があれば神様が助けてくださる。

その頃の私には、神父様の言葉と聖書と神様が世界の全てだった。

今はもう、そんなもののゴミ以下の価値だけれど。

そして穏やかな空がぼっかりと浮かんでいる午後。

体育館の裏のあまりよく見えない少しばかり薄暗いところで全ての物語が始まった。

いや全く、随分と陳腐な始まり方で、今になって振り返ると笑いを堪えきれないのだけれどね。

「ウザいの。消えて頂戴？」

六人か七人か——・・・もう忘れてしまった。

けれどそれくらいの人数の女子に囲まれ、私は辛辣な言葉を幾つも投げつけられていた。

そして私の鞆の中から聖書を取り出しびりびりつと破く。

私は思わず悲鳴をあげそうになるが、引き裂いている女子の隣に居た女子に口を押えられた。

そしてバラバラになった聖書は地面に落とされ靴の爪先で踏みつけられる。

嗚呼、私の世界が踏みにじられる。嗚呼、私の世界が汚される。

「アハハハハハッ。あんたが悪いのよ？ 聖書なんか読んでいて何が楽しいっていうのよッ」

かくり、と膝をついて聖書を見た私を見下すように言い放つティンク。

聖書の残骸を拾おうとした私の手をぐつと踏む。

そして私の赤い髪を掴んで私を立ち上がらせ・・・思いつ切り頬を殴った。

「ッ！！」

「アハハハッ。あんたさ、死んで神様に会いに行けば？ あんたの大事な神様にさ！！」

彼女が言った言葉に他の取り巻きの奴らは爆笑する。

許せなかった。神様を信じなくなった今でもあいつらは許せない。口から血が出て服に落ちる。それを見てさすがにヤバいと思ったのか女子達は引き上げていった。

頬にそつと手を当てる。ひんやりとした冷たい手が心地良い。ゆっくりとしゃがんで聖書を拾い上げ、鞆の中に入れ始めた。手に水が落ちた。上を見上げたけれど相変わらずの澄み切った空で雨なんて降っていなかった。

目の下に指を置くと、指が濡れた。

私は、泣いている。

それに気づいた時には、もう涙が止まらなくなっていた。ぼろぼろぼろ。——止めどなく流れる涙は、私の頬を私の指を私の服を私の聖書を濡らす。

聖書の文字が涙で滲んだのがぼやけて見えて思わず笑みを漏らす。ええ、聖書があるのだから、神様がいらっしゃるのだから、私を助けてくださるの。

そう、分かっているのに涙が止まらない。

乱暴に涙を拭って私は聖書を全て鞆の中に入れ終えた。

鞆の持ち手を肩にかけ、歩き始める。

俯いて、泣いていたのと殴られたのが分からないように。

「うっ・えっ、うえっうえええっ・・・」

けれども遂に我慢できなくなって膝を抱えてしゃがみこんだ。
肩を揺らして膝を濡らす。

帰りたく、なかった。もし、苛められたのがバレたら大変な事になる。

だけれど、両親は自分の事で手一杯で私が殴られても気づかないだろう。

それに気づいたら（それを認めたら）、不覚にもまた涙が出てきてしまった。

「うっっ・ん、ぐすっ、うううっ・・・」

—— 嗚呼、神様。

ガチャリ。

無駄に音を小さくするようにして私は家の中へ入る。
靴を脱いで右の靴箱に入れた。そして、呟く。

「ただいま・・・」

誰も、返事をしない。まあ、当たり前的事。

両親は二人そろって別の相手と仲良く浮気をしている。

・・・—— はっきり言って、馬鹿みたい。

奥に行くと、テーブルがあってその上に紙幣が一枚。

今日はそれで食いつなげ、という事。

了解、と口の中で呟いて私はそれを持って家をでることにした。
家をでる前に私の部屋のドアが開きっぱなしだったが、閉めずに靴
を投げ入れた。

そして靴を引っ掛けて扉を勢いよく開けて外に飛び出す。

ブロロロロ・・・ブロロロロ・・・

トラックや車が行きかう道路。

それを横切って私はコンビニに入る。

今日は何を食べようか。

昨日はコンビニ弁当だったから今日はサンドイッチとかで良いかな。
此処の店員さんともすっかり仲良し。

三年前からお世話になっている。

・・・つまり、言い方を変えれば三年前から家庭崩壊が始まってい
るという事だ。

素晴らしい、家庭崩壊と苛めが年こそ違えど同じ月日に始まった。
記念日だねえと小さく呟いて私は結局サンドイッチと牛乳を買った。

家へ戻る。

パチリ、と居間の電気をつけて椅子に座った。

テーブルに顎をつけて目を閉じる。

どうしてだろう、苛められたのに、悲しくない。

きっと神様が、私の悲しみを薄めてくださっているのだわ。

嗚呼、神様。大好きです。ずっと貴方を信じています。

でも、貴方の創造物である人間の事は信じませんわ。

彼らは、いつだって私を裏切り私を傷つけ自分の欲望のままに動く醜き生物ですもの――・・・

ふいに覚醒した。

顔を上げ頬に触れるとテーブルの痕がくつきりついている。

私はどうやらあのまま寝てしまったらしかった。

時計を見ると、なんと四時半。

今からお風呂に入っても、十分学校には間に合いそう。

そう思っ私は椅子から立ち上がりお風呂場へ向かう。

お風呂に入る前に、洗面所の鏡の前に立った。

青く、まん丸い目に腰までは無いけれど長い赤い髪。

そう、私の瞳は普段は青色だ。けれど、本当の色は、薄い紅色。

私は「神の瞳」などと呼ばれて崇拝される事を好まない。崇拝されていいのは、神様のみだから。

故に、私はいつもカラーコンタクトで目の色をごまかしている。

鏡の前から離れ、バスルームに入った。

ザ――――。

肌にあたるお湯が気持ちいい。

しばらくそのまま目を閉じていたが、石鹸で体を洗い始めた。

ガチャリ。

バスルームのドアを開け、床に立つ。

タオルで水を拭きながら、欠伸をした。

どうやら、寝すぎたのがあたったらしい。

フラフラと制服を着て時計を見た。

いつの間にやら、六時半。

・・・二時間もお風呂場に居たのか、私は・・・
自分に呆れたのはこれが初めてだった。

学校に行かなければいけない。

まだ、時間があるので朝ごはんを先に食べる。

買いに行くのも面倒なので、自分で作る事にした。

冷蔵庫を開けると、卵があつたので目玉焼きを。

買い置きのパンがあつたのでオーブンで焼くことに。

作り置きのパテトサラダがまだ残っていたのでそれも皿に盛る。

簡単な祈りを捧げてからあつという間に食べ終わり、皿を台所へ持
つていき、洗った。

カバンに教科書類を詰める。

ふと、手が止まった。

聖書に手が触れたのだ。

・・・正しくは、『聖書だった物』だけれど。

学校に行ったら、苛められるのだろうか。

神様は、助けてくれるだろうか。

目を閉じ、深呼吸する。

もし、もし今日苛められたら神様にお祈りをしよう。

「いってきまーすっ」

無理に声を張り上げ、家のドアを閉める。

溜息を吐く。気が重い。

行くのが、嫌だ。

両親は教育はしてくれないくせに学校は良い所に通わせようとする。はつきり言って、しんどい。

でも、仕方がない事。肩をすくめて家に背を向ける。

自転車をこぎだすと、風が頬を擦っていって気持ち良い。

鳥が数羽木から飛び立っていく。

猫が目の前を走り抜ける。

いつもの日常だ。これが変わるって有り得るのだろうか。

変わらない、いつもの毎日

退屈な、いつもの毎日

変化が欲しい、いつもの毎日――

ガラリ。

「あーら、マゼンダ、お元気イ？」

・・・早速。

教室の扉を開けた途端ティンクが高飛車な声で近づいてくる。

取り巻きの女子達は口に手を当てて微笑している。

怒るのが普通なのだろうが、何故か怒りが沸かなかった。

馬鹿らしいと、心の中で思っているからかしら？

私は非常に馬鹿なティンクを一瞬だけ見上げ、すぐにまた視線を戻して自分の机に近づく。

古典的な苛め方法として椅子の上に画鋏を置くケースを昔本で読んだので確認してから座った。

言葉に対する苛めはともかく痛みを伴う苛めは嫌いだ。

痛いのは前から嫌いだったし。

机の中にも、変な物は入っていないようだった。

まだ、本格的に始めるつもりではないらしかった。

でも、油断は禁物。

何故って、私の後ろの席には彼女——そう、ティンクが座っているから。

最悪だ。

どうして、こんな時に限って一番後ろの隅じゃないのかしら。

背中が、無防備じゃない。

何かしてきたら、抵抗できないじゃないの。

「さー、授業を始めるぞー」

先生が、入ってきた。

さあ、今日がようやく始まった。

ざくり。ざくざく。

骨と骨の間を縫ってボールペンが、何かが私を刺している。

実に陰険だね。驚く位だね。

それにしても、ノートは取らなくていいのかしら。

あ、お仲間さんのを後で写すのね。

そんな事を考えつつ。

「・・・はあ、痛い」

私は痛い思いをしていた。

心臓などの、大事な部分には到達しないものの、到底我慢できるものではない。

肋骨の間を縫って刺し続ける彼女の頬を引っ叩いてやりたかった。

けれど、この陰険さには感心するわ。

じわじわと、私はいじめという名の闇に堕ちていく。

後戻りは、できそうになかった。

確かに、刺されているのも痛いけど、授業に集中できるのは嬉しい。ちょっと今日は眠かったのだが、この痛みのおかげで目が覚まされる。

後でお礼を言おうかしら。
いいえ、きつと怒るでしょうから止めておこう。

今日が終わったなら、教会に行つて苛めをやめてもらつよう、神様に
お願いしなくちゃね。

そんな事を考えながら、私は独り、微笑んだ。

「マーゼンダちゃんつ、今日も教会行くの？」

彼。クロウ・クリュー。通称、C・C。

紅き目と銀髪を持つ少年。

彼は自分の目の色を隠そうとしない。

私の本来の目はピンクと紫が混じつたような色だ。

けれども、彼の目の色は本物で、真紅で深紅である。

彼がどんな能力を持っているのか、それはどの位強いのか、皆分らないから彼を恐れている。

彼は図書室で声をかけてきた。

何故か、彼は私の目の秘密を知っている気がする。

そのあどけないようで残酷な笑顔は、全てを物語っているような気がする。

殺してやりたい。

私は、彼のような、賢者なのに愚者の振りをしている道化が大嫌い。

見ているだけで、その声を聞くだけで、イライラ。
何で私がこいつなんかとあんな事をしたかったのが今になっても謎のまま。

断ろうと思えば、そう出来たって言うのにね。
彼を無視して私は図書室から出る。

ペタペタペタ。

廊下を歩く私の足音と一瞬ずれて彼の足音。

絶対後ろについてきている。

私は速度を速めた。それに合わせて速くなる彼の足音。

私は走り出した。一瞬振り返ると彼も走っていた。

・・・・・・しつこい！！

堪忍袋の緒が切れた私は思いつきり爆走する。

そのまま学校を飛び出して、教会へ疾走。

扉を開けて、神様の像の御前で跪く。

手を組み、深呼吸して気分を落ち着かせた。

そして、イジメをやめてくれるように、祈った。

これできつと、明日からはイジメはない。いえ、絶対にない。
そう信じて私は帰路につく。

その夜、夢を見た。

神様がお助けくださる夢。

あの威光を放ちながら私を苛めた女子たちを諭すの。

そして彼女たちも改心して私に涙ながらに謝るの。

私は神様に感謝し、神様は私の頭を撫でて去っていくの。

そして、最後に神様は私にこう告げるの。

『明日の朝、必ず助けますからね、夢の中だけではなく
嗚呼とても、素晴らしい、甘い、夢。』

私はうきうきしながら学校へと向かう。

神様は、必ず今日助けてくださる。

そう、確信して。

ガラッ。

びしゃり。

私は頭からバケツと水を被った。
周りの嘲笑と憫笑が耳に届く。

「神様なんていないっつーのっ！！ あははははははっ」

頭に血がのぼって、何も考えられなくなる。

私は靴に入っていたカッターナイフでバケツをズタズタに切る。

神様は、助けてくださらない。

その事実と恥辱が私を怒らせた。

バラバラになったバケツが床に落ちる。

私はカッターナイフの刃をゆっくりと伸ばす。

チキ、チキチキ・・・

私はカラーコンタクトを取る。

皆が、息をいつせいに飲む。

もう、誤魔化すのはやめた。

私は私。

神様に裏切られ、人々から不気味に思われる色の瞳を持つ少女。
それがどうした。

かみさまなんて、しんじない。

私は笑みを浮かべる。

一歩踏み出した。皆が一歩後退する。

また一歩。すると後退。

面白い。声を上げて笑う。

「みんなー、おっはー……」

ガラツと勢いよく入ってきたクロウ。

そして私を見て立ち止まる。

睨むと、何故か笑ってきた。

いきなり彼は私の腕を掴んで走り出す。

驚いて、振り払えないうちに、学校の外。

いつの間にか、彼の手が腕から手へと移動しているのにハッと気づいて振り払う。

カッターの刃をしまつて鞆へ戻した。

彼はその行動をじっと目で追い、頷くと私の目を見つめる。

じっと見ていると引き込まれそうで怖くて私は怯んでしまった。

途端に顔を崩して笑う彼。

一体何がしたいの、と言ってやりたい。
そして彼は私の両手を自分の両手で包んで何故か目をキラキラさせながら言った。

「ねえ、一緒に旅しない？」

次の瞬間、私は彼の顔に拳骨を喰らわせた。
思いつきり、強く。

衝撃が拳に走ったのも構わず私はすたこらさつさと彼から逃げ出す。
もう、学校にも来れまい。

そう考えながら私は家へと走る。
ドアが開いていた。

慌てて家へ飛び込む私の顔面に、何かがぶつかる。
顔を上げると、それはそれはいかつい男が私を見下ろしていた。
ひよつとしなくても、空き巣？

・・・あらら、大変だわ。

悲鳴をあげようとしたら、口をふさがれた。
うつ・・・体が震えて力が出ない。

カッターは鞆の中、取り出せない。

鞆を持つ手から力が抜けて鞆は床に落ちる。

それを男は片方の手で私の口を塞いだまま片手で拾い上げた。
中を物色される。・・・カッターが見つからなければ良いんだけど・
・

見つけてしまった。

カッターの刃が私の首に押し当てられる。

扉を開ける前にカラーコンタクトを付けたのが間違いだった。

冷や汗が出て首筋を伝う。

でも、後ろで組まれた私の手に誰かの指が触れる。
それはゆっくりと私の手を開き、手の平に文字を書く。
くすぐったくてわらってしまいそうなのを必死で堪えて、その字を
読み取る。

『C l a w C l e w』

次の瞬間彼は私の背後から飛び出て男へと飛び掛る。
男が怯んだその隙に、私は男の手からカッターを奪った。
彼は男を押し倒して床に頭を何度もぶつける。
私は、彼にカッターを手渡した。

すると、男は慌ててクロウを押しつけて家から飛び出していった。
クロウの目の色に、それが宿す光に、怯えたのかしら？
そんな事を考えながら男の背中をぼーっと見ていた私に、彼は、

「僕に、借りができたね？ マゼンダ」

「・・・！！」

ヤラレタ。

私は額を押えて呻く。

数秒後、ゆっくりと手を退け、旅に出る際の条件を一つ出した。
『神様を殺しに行くのを、手伝って』

目には目を、齒には齒を。

そして、裏切りには、復讐を。

もちろん、わたしだって神様はしんじていたわ。

でもね、あんなめにあつたらだれだってうらみたくなるじゃない。

ええ、みずをかぶったあのいっしゅんは、神様などいないっておもったわ。

でもね、それじゃあどうしてイエス・キリストはよみがえったの？

ジャンヌ・ダルクは？ マリア様は？

そう、神様はかくじつにそんざいしている。

ただ、いちこじんのねがいをかなえられるほどおひまじゃないってだけ。

ふざけてんじゃないわよ。

せかいをわたしのてにーとか、あほらしいねがいならむししてとつぜんだわ。

でもね、わたしはたすけてくださいといったのよ。

なのに、どうしてたすけてくれないの。

うらむわ。にくむわ。

たすけをもとめているひとをたすけないなんて、神様しかくよ。

だから、わたしがころしてあげる。

あなたがくれた、このすてきなめね。

うらむなら、じぶんをうらめば？

ばーか。だいきらいよ。

動き始めた運命

「いっやあゝ、オーケーしてくれるとは思ってなかったんだあゝ」

「じゃあ、どうして誘ったのよ」

「それは僕が当たって砕け散れ主義者だからなのw」

溜息を吐いて私はクロウの背中を睨む。

彼の目は、今は銀色。

私が無理矢理カラーコンタクトを付けさせたから。

ただでさえ、彼は認めたくないけれど格好は良いので目立つのに、その上紅い目ときは・・・凄く困る。

だから私はもう一つの条件としてそれを出した。

神様を殺すことに関しては、彼はあっけないくらいにあっさりと同じ意してくれた。

彼も、私と同じ色の目を持っているから神様を恨んでいたのかもしれない。

私は彼じゃないのであくまでも推測だけれど。

彼は飛び跳ねながら私を振り返る。

それと同時に背負っているリュックも揺れる。

私と彼はとりあえず家の中を片付けてあの男の血もふき取って、食料とお金と着替えを詰めたリュックを持って学校のすぐ近くの公園に集まった。

服はセーラー服のまま。赤いリボンが風に乗ってパタパタ。

私の髪は背中一つ結びにされている。

旅に行くのに、まとめていなければ不便だと思ったから。

スカートはセーラー服のおかげで襷^{ひた}が激しい。
夏服だから、というのもあるのだけれど、ね。

私が背負っているリュックの中身は、冬用の制服とコートと財布と果物。

母と父の預金帳なども持ってきた。

だって、私の為に貯めていたお金なんだもの。

両親は、お金稼ぎで私の面倒を見ない言い訳としてそう言っていた。
だから、私が使ってあげる。

悪く思わないでよ、おとーさん、おかーさん？

スカートのポケットの中には先程のカッターナイフ。

あれが私の命を脅かし、そして救った。

私は、あれを護符として持つ事にした。

願わくば、私を傷つける者を返り討ちに出来るように。

今、私たちが居る所は、ロシア。これから南に行く予定。

私は・・・、自由だ！！

・・・甘かったわ。

人間に、本当の自由なんてモノは存在しない事、
分かりきっていたのに家を飛び出した事で予想以上に浮かれていた
みたい。

私はそんな事を苦々しげに感じながらひたすら砂埃が舞い上がる道

をクロウと二人で歩いていた。

私は、結局両親や学校からは自由になれたけれど、クロウのこの癪に障る話し方からは自由にはなれなかった。

全く、煩い奴。心の中でそう呟く。

クロウは私の数歩前を歩きながら砂埃を避けるために下を向いて足を動かしている。

「ねえ、やっぱり砂っていうのはさ、海辺にあるだけで良いと思うんだよね。」

ホラ、バカツプルの『待てよ』『うふつ、早く来ないと夏も私も逃げちゃうわよっ』『ってやつ。』

足跡が砂浜に刻まれてさ、一種のウザい青春恋愛ドラマって感じの追いかけてこいん砂浜が王道だよな」

「ええい、黙りなさいよ、鬱陶しい」

「ああん、つれないい」

・・・下を向いていても、彼の言葉はとまらない。

何でこんなにこいつの口からは止めどなく言葉があふれ出てくるのかしら。

不思議だわ。言葉を溜め込む四次元ポケットでも内蔵されているのかしら？

ああ、そうなってしまったらもはや人外よね。

流石に其れは無いとしても、こいつのお喋りは煩いわ。

話にメリハリが無いし、聞いていても面白くない。

無理に笑わせようとしているのかしら。じゃあ、相手を間違えたわね、お気の毒様。

今、私たちは未だにロシアにいる。ちなみに言うておくが、私達はロシア生まれのアメリカ人なのだ。

大抵の生徒は完璧なロシア人のだが、私達は違う。
それも、苛められる一つの原因となっていたのかもしれない。
・・・今更、そんな事を言っても仕方ないのだけれど。

「『平和』

それはこの世のすべての願い。

くだらない

『平和』なんて所詮、偽善なのに

嫌いさ、『平和』なんて とってもね・・・

嗚呼、でも一番嫌いなのは

こんなことを考える

僕自身なのさ」

・・・歌だけは上手いのね。

砂道にクロウの少し掠れた歌声が響き渡った。

「・・・クロウ。何でいきなり歌いだしたのが私には理解不能なのだけれど説明してくれない？」

私は少し歩調を早めてクロウに追いつこうとしながら呟いた。
確かに彼の歌は上手いが、別に歌う環境ではなかったと思う。
しかも歌い終えた後砂煙を思い切り吸い込んでゴホゴホやっているし。

バカの極まりって、やつかしら。

クロウが立ち止まり、私のほうを振り返った。

美しい笑顔で首を傾げる。
そして、唯一言。

「神様への、ちょっと早い鎮魂歌さ」

・・・貴方は、どこまでも氷のようね。
冷たい言葉を美しく響かせる。

嗚呼、聞く者を凍りつかせるわ。

茶色いコートが風に巻かれる。

フードを被り、私とクロウは歩き続けた。

小さく、でも楽しげに鎮魂歌を神に捧げながら。

「耳を澄ませ 黄金の空にはばたく旗は聞いた
道端で誰かが微笑む歌を

耳を澄ませ 強く握りしめられた花は聞いた
轟音で掻き消された歌を

耳を澄ませ 人の上で泣く人は聞いた
明日の夢をつんざく歌を

歌が流れ 日が流れ
慈悲の音が止まないまま
耳を澄ませ 目を閉じる
声が塵になる前に

耳を澄ませ 爆音に隠れた君は歌った
世界のすべてに聞こえるのに
なぜあなたには、届かないのですか

耳を澄ませ 目を閉じる
声が塵になる前に 歌おう
革命歌に、冤罪の意をのせて――」

私達は、小さく笑い合った。

・・・そして砂埃が器官に入り込み二人揃って咳き込んだ。

嘘。有り得ないわ。此処は何の面白みも無い只の地球じゃなかったの？

横を見ると、さすがのクロウもこの現状には驚きを隠せていないみたい。

ばかりと口を開けて目を見開いている。

私たちの目の前には、何十年も前に消え去った馬車は何台も走っていた。

さつきまで、ロシアの国境を越えるまでは私たちの知っている現代社会だったはずなのに。

状況が理解できないわ。

まさか、まさかタイムスリップなんてファンタジーな展開が待っているわけでもないでしょうし。

映画のロケである事を、ただただ願うのみね。

「・・・これは、アレだね。タイムスリップってヤツだね」

何で貴方は私の夢を壊すのよ。

クロウは私の淡い現実逃避をあつさりと砕いた。

無言の私の目の前を、またもや現実を見せ付けるかのように馬車が通り過ぎていく。

・・・ッ、ええーい、カメラは一体何処にあるのよ！！

慌てて現実逃避を再開する私の目の前に、板が飛んできた。
反射的に後ろに飛んで避ける。

飛んできたそれをよく見ると、それは只の板ではなかった。
人が乗っていて、板の裏にはローラーのような小さな輪が二つついている。

スケートボード、と世間一般に呼ばれているものが数十年前と言う設定の此処にあるのかしら。

ちらり、と頭の隅でそんな事を思いながら、私は板と共に飛んできて、頭を強く打ち、顔を顰めながら其処を擦っている男性を観察した。

後ろで一つ結びにしている長い青い髪に赤い瞳。

赤い瞳を隠すように薄茶色の四角いレンズのゴーグルをかけている。服はツナギで灰色。首には青いスカーフを巻いている。靴は茶色ね。年は・・・20前半、といったところかしら。

顔もそんなに悪くは無く、スラリとした長身だ。

「初めまして。状況が理解し辛いとは思うけど、落ち着いて聞いてくれ。」

君達は、時空の狭間に落ちてタイムスリップをしてしまったんだ」

その男性は頭を擦りながら私たちに微笑みかけた。

けれど、私はその笑顔を見る余裕が無い。

タイムスリップだなんて・・・そんな、ファンタジーな・・・ッ!!
私の視界はくるりと回った。

——嗚呼、認めない

「ハロー、マゼンダ。お目目ばっちり覚めました?」

目が覚めて最初に見たのがクロウの顔だとちょっと嫌。
絶対今日の運勢は最悪だろう。

ルックスに問題はない、頭にもそんなに大きな問題はない。
いつだって問題なのは、クロウの性格だ。

ああ、嫌。本当に嫌。なんだか吐き気がしてきたので私は口を押さえながら辺りを見回した。

私はベッドに座っていて、ここは狭い部屋の中。

先程の男の人はベッドの近くの椅子に腰掛けていて、クロウは・・・

「きゃあああ！ ちょっと、クロウ！！ 人の上に乗らないで頂戴！
ああ、人生終わった、もう生きていけないわッ」

そう、クロウは私の膝辺りに尻をどつかと落ち着けていた。

私は咄嗟に両腕を突き出してクロウを突き飛ばす。

クロウはどんでんころりと回転しながら壁に激突。
目をぐるぐる回してふらふらしているけど、自業自得なので気にしない。

先程の男の人はそんな私達を見て、何故か苦笑中。

一体何故なのかは別に気にしないけれど、彼が何者なのかは凄く気になる。

そこで私は単刀直入、ずばりと切り出した。

「貴方は誰？ そして・・・本当に私達はタイムスリップをしたの？」

男の人は多少儂げに見える笑みを見せて私のほうを見やる。

クロウは未だに頭を抱えてぐわんぐわんしているようだけれど、私達はどちらともそつちを見ない。

だけど、結局私達はクロウを視界に入れる事となった。

何故なら、クロウはぐるぐる回りつつ私が居るベッドの上に倒れこ

んできたのだから。

私は無言で枕をとり、上布団を取り、バリケードを完成させる。クロウは目をぐるぐるさせながらも涼やかに笑って、男の人よりも先に私の質問に答えた。

「この人はブルース。気軽にブルちゃんって呼ぼうね。

で、ばっさり現実逃避を斬ってしまうけど、本当に僕達はタイムスリップをしたのでーすッ!!」

本当に、人生終わったわ。今日の私の運勢、絶対最悪に違いない・・。

「・・・まあ、その。とりあえず、君達はどうして此处へ？

違法な国境越えでなければあそこで突っ立っているはずがないと思うのだけど。

ああ、もしかして、君達、密入国者？」

クロウの言うところのブルちゃん——はそのあだ名が恥ずかしいのか尻尻を赤く染め、後頭部を擦る。

でもそんな彼の口から飛び出た質問はズバっと私の心臓に命中した。そうなのだ、実は私達クロウのバカのせいで密入国してしまっているのです。

クロウのこんちきしょうは砂漠で野生の勘とかに頼ってあちこち歩き回ったあげく、

砂漠の真ん中にあるはずの飛行場に辿り着けず、かわりに国境にぶちあたりやがったのだ。

勿論見張りとか居るのだけど、歩き続けてきてくたくたで、ここからどれほどあるかも分からない、

・・・正直辿り着けるのかさえ不安な飛行場に向かうのがいい加減嫌になった私たちは見張りをやつつけ国境を乗り越えた。

しかもそのやつつけ方がさすがというかクロウの考えたものなのでちっとも頭を捻っていないのである。

砂漠と言えども見張りだつて休憩するわけで、つまり小さな建物が近くにあつたので

私たちはその陰に隠れ各々の武器を取り出して・・・二人で一斉に見張りの二名に襲いかかった。

作戦とかそんな洒落たものは一切なく、ただ飛び出す瞬間がクロウの方が私より少し早かったというだけ。

時間差攻撃とか言つて、複数で戦う時に便利な戦い方なのだから。でも、確かに今思えば作戦なんて物はいらなかった。

見張り達は油断していて、私のような戦いにおいては素人な者でも勝てたのだから。

「そうなんだよ。でもねえ、僕達悪くないよお？　僕達を迷わせた砂漠がいけないんだッ！！」

クロウは男子にしては高らか過ぎる声で私の思考を遮った。

・・・つてうわあ。砂漠がいけないつて言い切ったよこのアホ。

腰に手を当て、完全に開き直っているクロウにブルースは一瞬呆気にとられたような顔をしたけれど、次にはぶつと吹き出した。

クスクス笑いながらブルースはこう告げる。

「言い訳はいいよ。・・・俺も密入国者でこの時代の人間じゃないから。」

まあ、とりあえず、歴史の勉強でもしに行こうか。

丁度良い材料が目の前にゴロゴロ転がっているんだし、ね」

「行く前に、この時代の服に着替えてもらつよ。目立つと面倒だから」

ブルースは立ち上がった後に、思い出したように言って部屋から出ていき、またすぐに戻ってきた。

ツナギの灰色の服を二枚と、靴や四角レンズのゴーグル。

ほぼ彼自身の服と同じで、違うのはバンダナが私達の服には含まれていないことだけ。

・・・地味な服装がこの時代の特徴なのかしら？

そんなどうでもいい疑問を抱えながら私は服を受け取り、着替える場所がなかったので仕方なくトイレで着替えた。

ついでに髪を二つに縛り直し、ゴーグルをつける。

靴は柔らかく、履きやすいし歩きやすそうだ。

この時代はどうやら、見た目より快適さを優先しているらしい。

そして私はトイレから出て、待っていた二人と共に部屋を出た。

外にでてから振り返ると、どうやら私達の居た所は集合住宅のようだった。

「さて君達の時代は何年だった？ あ、ちなみに俺は3072年ね。

丁度第四次世界大戦の終戦記念日にこっちにやって来たのさ。

ここじゃまだ第一次すらやっていないそうだよ」

「僕達は2008年。第二次はやったけど、第三次はまだだったよ」

すたすた歩くブルースの後を小走りで着いていきながらクロウは問いに答える。

そう、と小さな呟きを漏らしてブルースは急に立ち止まった。

目の前にあるのは時折機械音の聞こえてくる小さな工場のような建物。

ブルースはそれの扉を開け、中に入っていた。

私とクロウも少し迷ったけれど、結局中に入った。

風で扉が閉まる。

それは物凄く煩い音をたてたが、私は目の前の光景に驚いてそれを気にしていられなかった。

私達と同じ服を着た人達が、大勢働いている。

彼らはどうやら、ブルースの乗ってきたスケートボードを作っているようだ――。

「ほい、ほい、ほい、と。三台で良いんですよ、ブルース兄貴？」

「ああ。礼を言うよ、ブロント」

金髪の短く天然パーマの入ったブルースより若干若い青年がスケートボードを三台机の上にどんと置いた。

黄色の瞳を煌めかせて笑う彼にブルースは笑顔で頷く。

・・・つて、え？

三台という事は、私も乗る事になるのかしら、うん？

私は恥ずかしながらスケートボードに乗った経験が全く無い。

言うべきなのだろうか・・・。いやしかし、運動神経は良い方だし・・・。

私がそうやって一人悩んでいる内にブルースはその三台を抱え、工場から出ていこうとしていた。

慌てて追いかける私や先を歩くブルース達に、金髪の青年はいつまでもにこやかに手を振っていた。

「さて。このスケボーはね、青いボタンがゴー、赤いボタンがストップ。信号の要領で覚えてね。

後ろの足に体重をかければ上に上がり、前にかければ下に落ちるか

ら。

オーケー？ スピードが出すぎだと思ったたら背中を反って。反対だったら腰を低く前屈みになって」

うん。意外と簡単そうね。

工場のすぐ前でブルースの説明に私は心の中で相槌を打つ。

スケートボードに両足をのせ、板に付いているゴムで足を止める。

留具があるのは素晴らしい事だわ。途中で落下する心配もなし。

クロウは口笛を吹き鳴らしながらゴムを指で引っ張って遊んでいる。私達の準備ができたと思ったら、ブルースはにっこりと笑った。

「では、いざ空の旅へ」

「おーッ！！」

クロウはノリノリで拳を振り上げ、私はグーを作って顔の横で軽く振った。

そして右斜めにある青いボタンを全員で一斉に押す。

途端に体がふわりと浮かび、私はぎょつとして慌てて悲鳴を飲み込んだ。

もう一度青いボタンを押せ、とブルースが叫んだのでしゃがんで手を伸ばしてぽち、と押す。

その瞬間――

もう、死にたい。

うえええ。吐く吐きます我慢しています。

風を切りながら、私は必死に吐き気を堪える。

先ほどボタンを押した瞬間、私の乗ったスケートボードはひっくり

返り、私は宙吊りになってしまった。

クロウはそれを見て指差してゲラゲラ笑うし、本当にあれは恥ずかしかった。

最も、ブルースがすぐに助けてくれたのでその一種の拷問はあつという間だったけれど。

それから何とか風の軌道に乗る事ができて空を飛んでいるが、意外とこれは怖い。

私は実は高所恐怖症で、十歳位まではブランコにすら乗れなかったほどに高い所が嫌いなのである。

まあ、と言っても不安定で高い所が嫌いというわけなので飛行機などは普通に乗れるのだが。

・・・しかし、このスケートボードは不安定極まりない。

固定されているのはゴムで止められた足だけだし、立っているからバランスを崩しやすい。

しかも横ではバランス感覚がありすぎるクロウが空中大道芸を繰り広げているから見ていると酔ってしまう。

「はい、こちらが大広場です。

でもヤのつく人達の溜まり場でもあるから良い子も悪い子も近づかないようにしています」

どこぞのアナウンスのような口調で、ブルースが町の様子を説明してくれているが、そんなものを見る余裕はない。

遅れをとらないように飛びながら吐き気を堪えるので精一杯。

これ、酔いやすい体質の人の事を全然考えていないわよね、全く。クロウはくるくると側転しながらへーへーと適当に相槌を打っている。

そんな時、一人の威勢の良い女性の声が大広場に響き渡った。

その声は、ブルースの名を叫んでいたように私には聞こえたのよね、何故か。

私は説明を求めて彼を見たけれど、彼は下唇を噛んで何かを考えていた。

「赤いボタンと青いボタンの間に黄色いボタンがあるからそれを押して」

考えるのをやめたのか、ブルースが呟いたので、私達はその通りにする。

するとスケートボードはゆっくりと降下し、地面から僅か数cmのところまで止まった。

ブルースが軽やかに飛び降りたので、私も軽やかにではないけれど飛び降りた。

そして私はブルースの視線と同じ向きに視線を合わせてみる。

視線の先には先ほどのブルースの名を叫んだ女性がいて、彼女はこちらに肩を怒らせながら向かってきていた。

彼女は露出度が高く、着る事自体難易度の高そうな服を見事に着こなしている。

美人と言えば美人なのだろうけれど、素人にも分かるような殺気を垂れ流しにしているせいでとても怖そうに見えた。

ブルースがぼそりと面倒臭そうに認めたくないかのように一言、呟いた。

「・・・ミドリだ」

「これは気の強そうなお姉さんだね・・・僕あの人苦手かもお。なんかさ、自分の主義主張を人に押し付けて満足するタイプって僕嫌いなんだよね、傲慢でさ」

激しい嫌悪を感じて横を見ると、クロウが涼やかな表情でミドリを見つめていた。

けれど、私の能力を誤魔化す事は、流石のクロウもできなかったみたい。

私の能力——それは人の感情を読み取る事ができるという力。

勿論、いつもずっとその感情を見ることはできない。

その感情が激しい時や私が知りたいと望んだ時だけ、この能力は発動する。

そして今のクロウの感情は、凄まじいパワーを持った・・・これは、憎悪？ 嫌悪？

私の能力は弱く、具体的に何を考えているのかまでは分からない。だから私にはクロウがどうしてミドリを嫌っているのが分からない。

・・・でも、ミドリが自分の主義主張を押し付けるタイプなのは一目で分かる。

「ブルースも大変そうね、あんな性格不美人な人に怒鳴られて」

私がクロウに賛同の意を漏らすと、クロウは驚いたようにこちらを見て、頷いた。

ブルースとミドリは、私達には会話が聞こえない距離まで歩いて話をしている。

私達は大広場の入り口にいて、彼らは大広場の真ん中で言い争っている。

他の人々も大広場にいるのだけれど、ブルースとミドリの周りには見事に誰もいない。

表情や体の動きを見る限り、ミドリは怒っていてそれをブルースが宥めようとしている構図のようだわ。

けれど私の推察が正しければ、ブルースもそろそろ怒ってもおかしくない。

・・・そう私が考えた瞬間、ブルースが一喝した。

「しつこいな！ だから彼女が彼女だと言っているだろう！！
あれが仕事を間違えないのは君も十分知っているだろう！？ 君は
俺もあれも疑うつもりかッ」

その瞬間のクロウの感情は、私にはとても言い表せない。

憎悪と焦燥と・・・何だろう、これは。

歓喜に似ているけれど、そんなあつさりとした喜びではない。

こんな感情を抱いている人を、私はこれまで見たことがなかった。

「んーと、とりあえず僕達に食料とかくれなかな？

ミドリ、きみが怒っているのはここに余所者が来たから、でしょ。

それなら僕達は食料をもらえたらすぐ出て行くよ、まだ旅は終わって
いないしね」

神経が随分と図太いのね、クロウ。

クロウはブルースの一喝で広場に満ちた沈黙をあつさと破った。

ミドリはしばし固まり、私達の方に顔を向けた。

・・・悔しいけど、やっぱり美人だわ、とその顔を見て思う。

それでそのまま誰も何も言わないで、風が二回ほど吹いた後に、ブルースが口を開いた。

私はブルースがこう言うってくれる事をどこかで期待していたのかも
しれない。

だって、ブルースの言葉を聞いた瞬間、私は少しほっとするような
嬉しさを感じたもの。

「その事なんだけど、俺も一緒に行くよ。君らだけじゃ危険そーだ
し」

ミドリはそれを聞いて、ふう、と溜息を吐きくると背を向けて広場から去っていった。

私達は無言でその背中を見送る。彼女が何故突然引いたのか、少し不思議だわ。

ブルースが戻ってきて、やれやれというように頭をこしこし、と掻いた。

やっぱり、ミドリは苦手だな・・・疲労の溜まった声で、そんな事を呟く。

クロウが笑って、なっさけないねえと意地の悪い目でブルースを見つめてからかった。

ふと、空を見上げる。さっきよりも遠くなった空は、今日も変わらず、澄んでいた。

「マゼンダー、帰るよぉー」

「あ、待ってちょうだい」

そんな空から視線を感じた気がするの・・・私の気のせいね、きっと。

茶色い家々が視界から消えていく、もう慣れてしまったその風景を横目で眺めながら私達は工場へ戻った。

工場の前には前に私達にこれを貸してくれたブロントという人が立っていて、私が外すのを手伝ってくれた。

その際に少し話をしたのだけど、どうやらブルースやブロントは革命に失敗して難民となったみたい。

そして逃げてくる最中に不法入国して、タイムスリップ・・・という興味深い展開に遭遇したらしい。

そこにはミドリがいて、喧嘩になりかけたけれど人当たりの良いブ

ロントのおかげで仲間となったという事ね。

ミドリさんもタイムトラベラーなんですよ。あ、と言っても僕らより大分先の人ですけどね。

そう言っただけで静かに笑うプロント。ボードを外した後、私達は話をしながら工場の中に向かっていく。

正直、少し衝撃を受けた。私の周りには、妙なもののばかりが集まってきた。

それとも、私が妙なものに近づいているのかしら？

ブルースが先に立って工場の中を案内してくれている。

とても広く器具も充実していて、何故いきなりの旅人がこれらが貰えたのだろうと不思議に思った。

「ミドリがさ、説得してくれたわけ、俺達に場所を提供しろって。あいつ、性格きついし正直俺は嫌いだけど、ここを歩いていると良い人だと思っただ」

私の思考を読んだかのようにブルースの背中が笑う。

耳に痛い機械音が消えて、私達はボードの収納場へと到着した。

何千・・・はないけれど、何百という数のボードが所狭しと並んでいる。

ボードの色も大きさも形も様々で、子供用の青く小さいのから大人用の茶色い大きいのである。

クロウが背後で小さく口笛を吹くのが聞こえた。

私達は圧倒されて立ち止まっていたが、プロントの呼ぶ声に現実に引き戻され、慌てて追いかけた。

「これが目玉中の目玉、エネルギー不要の飛ばし屋、ユイールだ」

ブルースが誇らしげに示したのは、オープンカー。

主体が赤色で、座席は茶色。右ハンドルで、四人乗りの物だった。

ブオン、ブオオオン・・・・・・・・

爽快とはお世辞にも言えない汚い効果音と共にそのユイールが煙を吐く。

ブルースが説明すると同時にひらりと飛び乗ってエンジンをかけたのだ。

こういうところが、素敵だなあ、と思う。私と同年代の少年にはない、余裕のある格好良さ。

その私と同年代の少年、クロウは私の隣できゃあきゃあ言って手を叩いている。

そんな私よりも女の子らしいクロウは、ユイールに近寄ると助手席に飛び乗って、私を誘った。

ブルースも私を見ているので、仕方なく私は後部座席に座る。

「えー、行き先不明、旅行時間も不明の旅、始まりますー。あ、プロント。計画開始だからよろしく」

「・・・・！ 分かり、ました。ブルース、貴方方に神の祝福があらん事を」

ブルースがアナウンス口調でお茶目に呟いて、プロントに私には分からない事を告げる。

その途端、彼は小さく息を飲んで、でもすぐにその驚きを隠してこくりと頷いた。

私は首を無意識に傾げる。ブルースの台詞の中にどう驚くところが

あつたのかしら？

けれどその答えに行き着く前に、ブルースがもう一度盛大にエンジンを吹かし、私達は工場から出た。

前よりも少し低くなった同じ世界を見ながら私達は広場を横切る。

広場の前でミドリを見たけれど、それを二人に言う前に私達は広場を通り過ぎてしまっていた。

町を出る前に、私達はブルースのお金で食料など旅に必要なものを買い集めた。

私達のお金を受け取ってくれる人もいたけれど、圧倒的に拒否する人のほうが多かったから。

そして私達はボードで追いかけてきたプロント達、ブルースの仲間によって見送られながら町を後にした。

「さあて、どこに行く？ 君達の旅の目的は？」

「僕達は神殿に行きたい。そこには神がいるはずだから。僕達の旅の目的は——」「神様殺し、よ」

私の今の唯一の生きがいは、それだけ。だからこれだけは、自分の口から伝えたかった。

ブルースはひゅーと口笛を吹くと、わぁ、だいたーんと茶化して明るく笑う。

そして煙草をポケットから出し、火をつけて口に銜え、ユイールを更に速く走らせた。

——さらりと乾いた風が吹く。女はそれに揺られる自らの髪を軽

く押さえ、眩きを漏らした。

——第二地点、突破確認。運命は全て計画通りに進んでいる、L。

——了解。任務ご苦労、M。B2と共にこちらへ戻ってくれ。

その眩きに返された言葉は、酷く優しげな声で機械的台詞。

何処からともなく聞こえてくるその声に女は小さく頷き、女は目的の場所へ歩いていった。

そこは灰色をしていて、煉瓦でもなく木でもなく、鉄で作られている建物だった。

その前には、男が一人立っていて、弱弱しい笑顔を浮かべて女に話しかける。

——任務終了？

女はそんな頼りない男の声に鼻をふんと鳴らすと、嫌々首を上下に動かした。

ぱあ、と花が咲き誇るような笑顔を浮かべ、男は女に近づきその手を取る。

嫌悪感を顔に浮かべながらもその手を振りほどこうとしない女と笑顔の男は静かにその場から姿を消した。

運命は遂に加速しだした。

もう、それを止められるのは彼女しかない。

歯車よ、回れ回れ。世界よ、廻

れ廻れ。

少し。

タイムリミットまで——後、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9829d/>

神様なんて、大嫌い。

2010年12月27日20時28分発行